

新出資料・林原美術館所蔵『隣女和歌集』（巻一）三本の紹介

坂本美樹

一 はじめに

『隣女和歌集』（以下、「隣女集」）は、鎌倉時代中後期の歌人飛鳥井雅有の家集である。その伝本については数多く報告されているが、四巻の完本は江戸期書写の内閣文庫蔵本と群書類従巻二四三の一本のつごう二本のみで、その他は巻一を欠くか巻二のみの零本が多い。巻二が多く残存していることに關して、『新編私家集大成』の解題を担当した濱口博章氏は、「阿波国文庫旧蔵本の奥に「右隣女和詞集者飛鳥井雅有卿家集也、此冊卷第二自文永二年至同年云々、而今卷付略之、始末可為不足逐求他本可増補者也」とあるように、巻二に相当する一冊が流布していたもののようにある。」と述べている。一方、巻一に關しては現在のところ、先述の内閣文庫蔵本（江戸初中期書写）と群書類従本（江戸中後期書写）、そして桃園文庫本（江戸後期）の三本しか確認されておらず、今後の発見が期待されていたが、このたび、平成二十八年度関西大学研究拠点形成支援事業（代表・与謝野有紀教授）のプロジェクトの一環として林原美術館蔵の和歌資料を調査したところ、巻一について新たに三本の資料を

確認することができた。そこで本稿では、新出本三本の紹介とその本文の特色について検証したい。

二 林原美術館蔵『隣女和歌集』三本の書誌について

ここでは、今回確認できた三本の書誌について記す。

I 池田光政筆『隣女和歌集』巻一（寛文十二年六月書写本）

袋綴、四半型の冊子本。一冊。整理番号「書跡五〇五―二」。桐外函中央に「光政公御筆／雑書」、右肩上部「準備／光政公／雑甲第三八四號／十七筆」という貼紙がある。包紙には、中央に墨筆で「光政公御筆／五筆／隣女和哥集 一冊／△」と書かれている。また右肩上部に「故大御納戸」と書かれた貼紙があり、さらに右肩中央部には朱で「本一号／一ノ二内二」と書く。表紙は朽木色の原表紙。外題は表紙左肩に「隣女和詞集」と墨筆にて打付書にする（本文同筆）。見返しは本文共紙。寸法は縦二一・六cm×横十五・八cm。本文の料紙は斐楮混漣。前後に遊紙が一

丁ずつあり、墨付二十七丁の全二十九丁からなる。序文と和歌本文を有しており、どちらも一面九行詰め。和歌は一首二行書き（上下句分かち書き）にされ、部立は和歌よりおよそ二字下げ。墨筆にて集付けあり。歌の上下に墨・朱筆にて合点が付されおり、十七丁ウラの六行目下部（一〇二番歌末尾）には、朱の合点を擦り消した痕跡がある。当該本の末尾に「此一冊者参議藤原雅有卿之以／自筆本書写之畢／寛文十二壬子曆林鐘下旬／五筆」という書写奥書があり、署名はないが函書から池田光政筆と思われる。仮名序、本文、本奥書、書写奥書の順で構成されている。

Ⅱ 池田光政筆『隣女和歌集』巻一（寛文十二年十一月書写本）

綴葉装、やや小四半型の冊子本、一帖。整理番号「書跡五〇一一一四」。桐外函ヨコに右から「書／一六三」「準雑甲／自50／至53／癸四」「準雑甲48／光政公／癸四」「準雑甲／自33／至45／癸四」と四枚の貼紙あり。包紙は墨筆で「隣女和歌集」と書かれ、さらに右肩上に「準雑甲48／光政公／癸四」と墨筆で書かれた貼紙がある。表紙は茶色の原表紙。外題は、表紙左肩に墨筆で「隣女和歌集」と題簽書き（本文同筆）。見返しは金銀砂子を霞引きした鳥の子紙。寸法は縦十九・六cm×横十五・三cm。本文の料紙は鳥の子紙を用いる。全体は二括からなり、一・二括ともに八枚の紙を折った全三十二丁。そのうち前に二丁、後に三丁の遊紙がある。墨付は二十六丁。当該本も序文と和歌本文を有し、一面九行詰め。和歌は一首二行書き（上下句分かち書き）にされ、部立は和歌より一字下げ。Iと同じく、集付けと合点が付されている。当該本も末尾に書写

奥書を有しており、「此一帖者参議藤原雅有卿之以／自筆本書写之畢／寛文十二壬子年仲冬念四」とある。筆跡はIに比べてやや繊細な風であるが、函書に加えてIの書名の筆跡との一致から池田光政筆と考えてよいだろう。当該本もIと同様に仮名序、本文、本奥書、書写奥書の順で構成されている。

Ⅲ 池田綱政筆『隣女和歌集』巻一

卷子本。一軸。整理番号「書跡二九三一二」。桐外函中央に「綱政公御筆」、右肩上部に「準備／甲卷／第／自八九／至一五四／號」との貼紙あり。包紙は中央に墨筆で「綱政公御筆／隣女和歌集」と書く。「準備／甲卷／題一〇九號」「準卷公一〇九／壬二」「故大御納戸」「明治八年五月□」といった四枚の貼紙がある。「準備／甲卷／題一〇九號」と書かれた貼紙の下には、朱筆で「卷五二ノ／四十三内廿七」と書かれている。また、中央部に「廢」という朱の印があり、この印から当該本は明治期が大正期あたりに廃棄される予定であったことが窺われる。表紙は芥子色に雷文繫ぎが描かれた原表紙。外題は、墨筆で「隣女和歌集」と打付書き（本文同筆か）。見返しは一面全体に金箔が貼られた贅沢な仕様。寸法は縦二一・八cm（軸長二二・七cm）×横全長六七・二cm。本文の料紙は鳥の子紙を用いる。当該本も序文と和歌本文を有し、和歌は一首二行（上下句分かち書き）、部立は和歌より一字下げに書く。天地に墨筆で界線あり。当該本も前二本と同じく墨筆による集付けと、墨・朱筆の合点が付されている。こちらも署名はないが函書から池田綱政筆と考えられる。また、当該本は書写奥書がなく、仮名序、本文、本奥書の順で構成され

ている。

以上、林原美術館に所蔵されている三本の「隣女集」について、その書誌を記した。当該資料に関して最も注目される点は、三本のうち二本が書写奥書を有し、しかもその書写年代が江戸初期（寛文十二年）と、現在残っている巻一のなかで最も古い可能性があるという点である。先述のとおり、巻一の伝本については、内閣文庫蔵本、群書類従本、桃園文庫本の三本が伝わっているが、書写奥書は残っていない。さらに奥書には、作者自筆本をもって書写した旨が記されていることから、当該本は、大変資料的価値の高い伝本であるといえよう。

それでは、林原美術館所蔵「隣女集」三本の本文にはいったいどのような特色があるのだろうか。光政筆本の二本は書写奥書があることから、その書写年代は明らかであるが、底本が同じかどうかについては不明である。また、綱政筆本については書写奥書がないため、その前二本との関係についてはさらにはつきりとしれない。そこで、次章では三本の本文異同から、その特色を検証したい。

三 本文の特色

林原美術館所蔵「隣女集」三本を書写年代順に並べると次のとおりである。

- (Ⅰ) 光政筆寛文十二年六月書写本（以下、「六月本」とする）
- (Ⅱ) 光政筆寛文十二年十一月書写本（以下、「十一月本」とする）

(Ⅲ) 綱政筆本（以下、「綱政本」とする）

右三本の異同について調査したところ、24の異同が確認できた（なお、仮名遣いや漢字の相違による異同は含めていない）。

これらの異同のうち、六月本と十一月本は一致するが、綱政本と対立する箇所は次のとおりである。

【表一】 六月本と十一月本は一致するが、綱政本と対立する場合

頁	番号	六月本	十一月本	綱政本	備考
3才②	序	哥のにほひ	哥のにほひ	言のにほひ	
3才③	序	ふるき言	ふるき言	ふるき哥	
3才④	序	たかひかめる	たかひかめる	たかひひかめる	
5ウ⑥	6	よそのかすめる	よそのかすめる	さとのみ霞む	六月本、十一月本は右に「サトノミカスム」と記す
11オ⑥	54	ちくさの花は	ちくさの花は	ちくさの花の	六月本、十一月本は「は」の右に「の」と見せ消ち
15ウ⑤	93	さひしさを	さひしさを	さひしさは	綱政本は「は」の右に「を」と記す
17ウ④	110	うち川の水	うち川の水	宇治の河水	綱政本は「宇治の」の「の」を見せ消ちする。さらに「河」と「水」の間に「の」の補入記号あり
19ウ②	127	たのめてもこぬ	たのめてもこぬ	たのめてこぬ	綱政本は「て」と「こ」の間に補入記号あり
20オ⑤	133	こひしなは	恋しなは	恋しなん	綱政本は「ん」の右に「は」と記す
25ウ④	181	すみかたのみや	すみかたのみや	すみかたの世や	綱政本は「世」の右に「み」と記す

* 頁、歌番号は本稿巻末の「付・隣女和歌集」（寛文十二年十一月書写本）の翻刻による。

3才②は「哥」と「言」で対立しているが、これは両者のくずし字が似ているためにおこった誤写であると考えられる。また、3才④の「たかひかめる」は、綱政本のみ「たかひひかめる」となっているが、本文をみると、一文字目の「ひ」の下に踊り字があるようにみえることから、これもまた誤写であろう。その他の異同もほとんどが書写者による

誤脱や誤写の可能性が高いのであるが、唯一、5ウ⑥の6番歌については語彙がまったく異なるため、誤写ではないと考えられる。このような異同が生まれる原因として考えられるのは、六月本と十一月本は底本を同じくするが、綱政本のみ上記二本とは底本が異なるという可能性である。つまり、綱政の書写の段階において、二種類の「隣女集」が存在していたことがここで推測されるのである。

次に、六月本と十一月本は対立するが、六月本と綱政本が一致する場合をみてみたい。

【表二】 六月本と十一月本は対立するが、六月本と綱政本が一致する場合

頁	番号	六月本	十一月本	綱政本	備考
2オ⑦	序	いとけなかりし	いとけなりし	いとけなかりし	十一月本は「いとけなりし」の「な」と「り」の間に「か」の補入記号あり
6ウ⑦	16	いくかもあらぬに	いくかもあらぬ	いくかもあらぬ	六月本は「ぬ」の下に「に」の補入記号あり
10ウ⑥	46	うつりかよりか	うつりかよりも	うつりかよりか	十一月本は「も」の横に「か」と記す
19ウ④	128	ふけゆくを	更けゆけは	更行を	十一月本は「けは」の右に「くを」と記す
20オ⑥	133	いのちとかせむ	命とかみむ	命とかせむ	十一月本は「み」の右に「せ」と記す
24ウ③	172	追て吹まはす	追てまきまはす	追て吹まはす	十一月本は「文字目の「ま」の右に「ふ」と記す

※ 頁、歌番号は本稿巻末の「付・『隣女和歌集』（寛文十二年十一月本）の翻刻」による。

たとえば、【表二】の2オ⑦をみてみると、六月本、綱政本では「いとけなかりし」となっているが、十一月月本では「いとけなりし」となっている。「か」は崩し字にするとみえにくいことから、脱落しやすい仮名である。よってここでは書写者が書き落としてしまったことによる異同であると考えられる。その他の箇所も意味が変わるような大きな異同がみ

られないことから、六月本と十一月本は対立する箇所があるものの、比較的同じ性格を有した伝本であり、また綱政本についても、【表二】で掲げた箇所については特に六月本に近い本文であるといえよう。それでは最後に、六月本と十一月本は対立するが、十一月本と綱政本は一致する場合をみていこう。

【表三】 六月本と十一月本は対立するが、十一月本と綱政本は一致する場合

頁	番号	六月本	十一月本	綱政本	備考
1ウ①	序	と思へるなるへし	と残しかつはなき後のかたみと思へる成へし	と残しかつはなき後のかたみと思へる成へし	六月本は「と」の下に「残しかつはなき後のかたみと」の補入記号あり
2オ①	序	をとをしらん	ほとをしらん	ほとをしらん	六月本は「を」の横に「ほ」と見せ消す
2オ⑤	序	心ひとつにおふるあしをも	心ひとつにひとあやまり難波江におふるあしをも	心ひとつにひとあやまり難波江に生ふるあしをも	六月本は「ひとつに」の下に「ひとあやまりなには江に」の補入記号あり
4オ⑨	序	しかり	しかなり	しかなり	
11オ⑨	55	むすひもあへぬ	むすひもあへず	むすひもあへず	六月本は「ぬ」の右に「す」と記す
15オ⑥	90	とやまふき■風	とやまふきこす	とやまふきこす	六月本は■の右に「こす／集云」と記す
20ウ⑥	138	わかれしに	別ちに	別路に	六月本は「し」の右に「ち」と記す
23オ⑧	161	独ぬるよを	ひとりぬるかな	独ぬるかな	

※ 頁、歌番号は本稿巻末の「付・『隣女和歌集』（寛文十二年十一月本）の翻刻」による。

序文の異同箇所については、4オ⑨のように書写者の誤写と考えられる例が多いが、1ウ①・2オ⑤に関しては、一節が抜けてしまっている。また、23オ⑧も六月本では「独ぬるよを」であるのに対して、十一月本・綱政本では「ひとりぬるかな」と末尾が詠嘆になっている。当該箇所も書写者による誤射・誤脱と考えられなくもないが、一つの可能性としては、六月本は草稿段階の雅有自筆本を底本にしており、十一月本・綱政

本は六月本の底本よりも本文が整理された伝本を底本にしたため、このような異同が生じたとも考えられる。しかし、意味が大幅に変わるような異同は1ウ①と2オ⑤、23オ⑧(161番歌)しかなく、その他は誤写である可能性が高いことから、【表三】の箇所についても、六月本・十一月本・網政本はほぼ同じ系統に属していると考えてよいであろう。

四 おわりに

以上、林原美術館所蔵「隣女集」三本について、その書誌と本文の特色を記した。本文の特色については、ほぼ同じ系統であると考えられるが、ところどころ誤写では説明できない異同があるため、それぞれが異なる伝本を書写した可能性も否定できない。また、同じ一本を書写したにしても、本行を書写したものと改定箇所を書写した本がかつて存在し、それぞれ本行と改定箇所を書写した結果、現状のような本文異同が生じた可能性も考えなければならぬであろう。本稿では今回発見した三本とその他の伝本との書承関係や、善本であるかどうかについての検討をおこなわなかった。それについては今後、林原美術館本以外の伝本との本文比較をおこなったうえで明らかにしていきたい。

【参考文献】

- ・『新編国歌大観CD-ROM版』角川学芸出版(二〇〇七年)、『隣女和歌集』 解題(青木賢豪・田村柳壺両氏担当)

- ・『新編私家集大成CD-ROM版』笠間書院(二〇〇九年)、『隣女和歌集』 解題(鹿目俊彦・濱口博章両氏担当)
- ・『和歌文学大辞典』古典ライブラリー(二〇一四年)
- ・『天理図書館善本叢書 和書之部 第四十四巻 平安鎌倉歌書集』八木書店(一九七五年)
- ・『国立歴史民俗博物館 貴重典籍叢書』文学篇 第十巻(私家集四)臨川書店(二〇〇一年)
- ・中川博夫「桃園文庫本『隣女和歌集』巻一翻印・解題」『国文鶴見』第四十号 鶴見大学日本文学会(二〇〇六年)

〔付記〕本研究は、平成二十八年度関西大学研究拠点形成支援経費において、研究課題「地域文化資源をプラットフォームとした地域共同活動の創生拠点形成」として研究費を受け、その成果を公表するものである。また、今回の調査ならびに図版掲載を許可してくださった林原美術館に厚く御礼申し上げます。

(さかもとみき・本学大学院生)

付・『隣女和歌集』（寛文十二年十一月本）の翻刻

最後に、林原美術館所蔵『隣女和歌集』三本のうち、書写年代の古さは三本のうち二番目であるが、脱落箇所が少ない寛文十二年十一月書写本の翻刻を掲げる。

〔凡例〕

当該本は中川博夫氏によって報告された桃園文庫本『隣女和歌集』巻一の凡例にしたがって翻刻した。凡例は次のとおりである。

- 1 漢字・仮名・反復表記はそのままとし、私に句読・清濁を施すことはしなかった。
- 2 平仮名・片仮名は通行字体に統一した。漢字は底本の表記に従ったが、異体字は正字体に統一した。「歌」「詞」「哥」は区別した。
- 3 改行も底本どおりとし、改丁は、「1才」の形で示した。
- 4 歌頭の墨鉤点は「＼」「／」で、歌頭・歌脚の朱鉤点は「＼（朱）」のごとく示した。
- 5 補入符の小星点は「○」で示した。
- 6 歌頭に通し番号を付した。番号は『新編国歌大観』に同じ。

〔翻印〕

『隣女和歌集』（表紙）

（二丁白紙）

やまとうたはみなかみひの河よりいて、
なかれたまかきの国つわさとなれり
しより代々の勅撰家々のうちき、い
にしへの後をつきて今の世に絶す成
ぬるなかに哥讀と思へる人たかきもく
たれるもみつからのうたを記て家の集と
せりかれは心の花いたつらに散うせ
言葉のはやしむなくもれ木とならん
ことをおしみもしはすゑのよの集のため 1才
と残しかつはなき後のかたみと思へる成
へしこゝに人並／＼に正元よりこのかたわか
のうらにかきすてもくつをひろひあ
つめて隣女和歌集といへること有さきに
いふところの哥仙たちの趣にあらず
これはたゝ此道にふける思にひかれてたへさ
る身をろかなる詞をかへりみすおりに
つけときにしたかひてこゝろさしをの
ふるかすを見てとし／＼にふかく
なりあさくをこたる心のほとをしらん
ためはかりに書とゝめぬるをしら糸の
1ウ

このすちをはしらすくれ竹のよのつねに
ならひてみんなは賤か、きねにさらす
布を心ひとつにひとあやまり難波江に
おふるあしをもわかめにはよしとみるに
なむ成ぬへしおほよそいとけな^かりし
よりかす／＼にかき置しことの葉度／＼
のやとの煙に大空の霞となりにしかは過にし 2才
弘安のはしめよりことなるふしなけれとゐな
のさ、はらしけるにまかせてたかき見し
かきをもいはすなほきみやきまし

はらされはくちきのそまにまかりゆか
めるをもきはすさなからかきのせぬ
る朝今の人のき、のちの世のそし
りのかる、かたなく憚多けれとねかふ
ところは心さしのふかくてよのいとなみ
にまきれぬかたをあはれみてつた

2ウ

なきことはいやしきすかたをはおもひゆ
るせとなり又題のしたい哥のにほひことは
のかきさまふるき言かやうのふし／＼
さなからおほくかたくなにたまがひかめる
こと身つからと、のへんとすれは老の病
ものうくふた、ひみんはたわれ恥かしく
いはむや人のてをからんすらかたはらいた

きによりて此道にあやめもわかぬ輩に
まかせてかき集させぬれはうしろ 3才
めたけれとちからなき身のいたつきに
なんまけにたるもしみむ人この趣
をおもひて嘲ことなくはのそむところ
たりぬへしそも／＼わか、みは新古今
新勅撰のすかたを心につけ中比より
は万葉古今等の心ちをいかてかとしひ
ねかいへとも箕裘をたにまなひみす
かの西施かとなりの女のかれをうらや
めるよそほひもとのかたちよりはます 3ウ
／＼みにく、なりけるになすらへてこの
集の名とせりといふことしかなり 4才

(白紙) 4ウ

隣女和歌集巻第一 正元年中

春

- 001 〳ゆきのうちのみやまのさとにたつ春は
冬のひかすをかそへてそしる 〳
002 〳けさよりははるのとなりになりぬとや
ふゆをへたて、かすみたつらん
003 〳けさみれはこほりとけぬる谷川の
したゆくなみに春やたつらむ 5才
004 〳うくひすもかすみもをそき雪の中に

- はるしるものはこゝろなりけり
- 005 春はきぬゆきけのくもははれやらて
／＼さなからかすむみよしのゝやま 〔朱〕
- 006 しからきのと山は雪けなをさえて
サトノミカス ヨそにかすめるはるの明ほの
- 007 ほの／＼と明ゆくそらをみわたせば
やまもとよりそかすみそめける
- 008 春のきるかすみのころもたちこめて 5ウ
よるへもみえすそてのうらなみ
- 009 もしほやくうらのけふりをたよりにて
はるはなみちそまつかすみける 〔朱〕
- 010 み山にはなをしらゆきのふるすより
軒はにうつるうくひすのこゑ
- 011 春きてもなを風さむきみ山木の
かけのゝくさに残るあはゆき 〔朱〕
- 012 霞めともまたみとりにはなりやらて
かれのゝくさにのこるしらゆき 〔朱〕 6オ
- 013 いつくにもむめかゝそする春の日の
いたりいたらぬさとのなければ
- 014 古郷のおいきの梅はさきにけり
むかしのはるの色をのこして
- 015 あさみとりなひくもしるし青柳の
いとかのやまの峯のはるかせ 〔朱〕
- 016 春きてもいくかもあらぬ〇いつしかと
こゝろにかかるはなのしら雲 〔朱〕
- 017 くもはゝな花は雪とやまかふらむ 6ウ
そらにかすめるかつらきのやま
- 018 みよしのゝ山のさくらの花さかり
みねにもおにもかゝるしらくも 〔朱〕
- 019 よし野山はなよりおくのしら雲や
かさなるみねのさくらなるらん 〔朱〕
- 020 〔古今〕 ふもとよりいくへの雲をわけすてゝ
しらぬやま路の花をみるらむ
- 021 みよし野ゝはなのかゝみとみゆるかな
あをねかみねの春の夜の月 7オ
- 022 くれぬとも月にはみてん春のよの
やみはあやなきはなさかりかな
- 023 もゝしきやおほうち山のさくらはな
雲井にふかくにほふはるかぜ
- 024 たちはなのほひならねとふるさとの
軒のさくらにむかしこひつゝ
- 025 いさゝらは散なはなけの花さくら
かせよりさきにおり盡してむ
- 026 〔朱〕 雪と降はなにのきはゝうつもれて 7ウ
さくらをふける春のやまさと 〔朱〕
- 027 〔朱〕 をのつからこゝろとけさは散はてゝゝ

さそふかせをもまたぬ花かな

028 けさふかはいかに風をもかこたまし
のとけきそらにちるさくらかな

029 峯のくもみきはのなみそさはくなる
ひらやまかせに花やちるらむ 〔朱〕

030 かへるへきならひなりとも春のかり
ことしはかりははなにやすらへ 8才

031 さすかまたはなのなこりやおしからん
なきてわかる、春のかりかね

032 名のみしてときは山の岩つゝし
みとりにかゝるはなもさきけり 〔朱〕

(二行空白)

夏

033 わかさりしうの花かきも白たへに
さきあらはるゝ夏はきにけり

034 しつのめかさらせるぬのや山さとの 8ウ
かきつのたにゝさける卵の花

035 としことをそさになれてほとときす
またぬうつきのそらになくなり

036 待わひぬをのかさつきの空にたに
なをもつれなきほとゝきす哉 〔朱〕

037 入日さすくものはたてのをりはへて
鳴やさつきの山ほとゝきす 〔朱〕

038 すゝか山明かたちかきせきの戸を

039 入鏡千 ふりいてゝなく郭公かな 〔朱〕 9才
夏のよの在明のそらのほとゝきす

040 おなしね覚の人やきくらむ 〔朱〕
なけやなけさよのね覚の郭公

041 ふたこゑきゝておもひ出にせむ
一こゑはゆめとおもひておとろけは

042 うつゝなりけるほとゝきすかな 〔朱〕
しられけりひけるあやめのなかきねに

043 またみぬゝまのそのふかさも
あし引のとを山をたに袖ぬれて 9ウ

044 いくほとともなき早苗とるらし
五月雨はひかすふれともなにはかた

045 もとのみきはをこえぬしら波 〔朱〕
さみたれにあまのかは浪たかゝらし

046 月のみふねのわたるよもなき
たか袖のうつりかよりもたちはなを

047 〔朱〕 〔朱〕
むかしことゝふつまとなしけむ 〔朱〕

048 入をもまたす明るそらかな 〔朱〕 10才
さみたれにきえぬうふねのかゝり火や

049 かつらのかはのほたるなるらん
木かくれにしつみなかるゝ山の井の

あかくもなつの日をくらすかな

(二行空白)

秋

050 うたゝねのたもとをかけてふく風の
めにみぬいろに秋をしるかな

051 ひさかたの空になかれぬ銀河
なをほしあひの影そみえける
10ウ

052 秋の露たかたまくらとむすふらん
入のゝすゝきはにいてにけり (朱)

053 なか／＼にちくさの花もなきのへの
しのゝをすゝき風そさひしき

054 むさしのやちくさの花はいろ／＼に
をさかへてける秋のしらつゆ

055 秋かせの吹しくをのゝ浅茅はら
むすひもあへす露そこほるゝ

056 秋もたゝおもへはおなしゆふくれを
なかめからにやさひしかるらん

057 はるはこし秋は都にくるかりの
いつもたひなる音をや鳴らん

058 秋風にかりはきにけり白雲の
みちゆきふりにこゑそきこゆる (朱)

059 ひさかたの天とふかりのおほひはに
はつしもふりぬ在明のそら (朱)

11オ

060 しからきの外山にかせやむかふらん
おのへのしかのこゑよはるなり
11ウ

061 ふき送るみ山あらしにつたひきて
コノサトササズ
さとまでかよふさをしかのこゑ

062 むらしくればれゆく雲のをひかせに
山めぐりするさをしかのこゑ

063 宮城のゝこのしたつゆにたちぬれて
入新後
いくよかしかのつまをこふらむ (朱)

064 ね覚してなをのこすよも長月の
あり明の山のさをしかのこゑ
12オ

065 ひさ型の月こそあらめ明ゆけは
しかのこゑさへやまに入らむ

066 うつらたつあさちの葉すゑうちなひき
ゆふへの露に秋かせそふく (朱)

067 ゆふされはくさ葉のつゆをふき過て
なみたをさそふ袖の秋風

068 さひしさはゆふへのかせと思ひしに
うすきりまよふあけほのゝそら

069 やまのはに待よの月はいてにけり
このさと人やいねかてにする
12ウ

070 くもりなき空すみわたるなかき夜の
つきのみふねのやまの秋かせ

071 山さとの庭の萩はら露散て

072 身にしむいろの月そさひしき
 〳〵おきあかす露のよすから影とめて
 月にやとかす庭のおきはら^{（采）}
 073 〳〵むさしのは心盡しの山もなし
 またれんものか秋のよの月
 074 〳〵神もさそ秋もなかはといはし水
 なに流たるつきはみるらむ^{（采）}
 075 〳〵諏磨のうらせき吹こゆる秋風に
 月さひわたる波の遠かた
 076 〳〵月影はよるともみえすみつしほの
 なかれひるまのこゝちのみして^{（采）}
 077 〳〵あかしがたあかてかたふく晨明の
 月ふきかへせ沖つしほかせ
 078 〳〵しはの廬まつのあみ戸もまはらにて
 13ウ
 079 〳〵きり〳〵すなにを恨みて浅茅生の
 あり明のつきに音はつくすらん^{（采）}
 080 〳〵たひねする野風をさむみきり〳〵す
 くさのまぐらのしたに鳴なり^{（采）}
 081 〳〵ふるさとのにはのあさちふうらかれて
 むしの音よはき秋のゆふしも
 082 〳〵吹過る風ならねともおきの葉に
 をとつれてふる秋のむら雨
 14オ

083 〳〵紅葉はをのれと染るいろなれや
 ときはの山もしくれふるなり
 084 〳〵山人の袖もいろにやいてぬらん
 つたはひかゝる谷のしたみち
 085 〳〵もみち葉をよるさへみよとてる月の
 ひかりさやけきかなひのもり
 086 〳〵をしかなく在明の比の山のはに
 もみちをわけていつる月かけ
 087 〳〵露しもにかねてこのはのうつろひて
 14ウ
 〳〵しくれをまたぬ神なひの杜
 （二行空白）
 冬
 088 〳〵かみな月しくれすとてもあかつきの
 ね覚は袖のかはくものかは^{（采）}
 089 〳〵神無月ふゆのはしめはかきくもり
 しくれはさためありけるものを
 090 〳〵あくるよのとやまふきこす木からしに
 しくれてつたふ峯のうき雲^{（采）}
 15オ
 091 〳〵たかねにはゆふひさすなりいこま山
 ふもとのさとのくもはしくれて
 092 〳〵なにゝかは紅葉のぬさをたむくらん
 しらすやあらし神なつきとは
 093 〳〵さひしさをいかにしのはん神な月

094 かせにしくれて木の葉ふる比
 〳くれなゐにいはなみたかしみなのかは
 おなしたかねに紅葉散らし〵
 095 〵かたおかのは、そのこのはちりはて、
 にはにをとする山下風のかせ
 〳風さむみひかけにもる、山したの
 〵くち葉かうへに残るあさしも
 〳音寒し夕しもむすふ浅茅生の
 〵かれはのをのにあらしふく也
 〳やまさとの岩のかけちのしもくつれ
 とはんといひし人もまたれす
 〳むらさきにかはりしはなも霜をけは
 またしらきくとうつろひにけり
 〳またふらぬゆきけのそらの雲をみて
 かねてこりをく山のしたしは
 〳した葉よりかへぬみとりはほのみえて
 はつゆきうすき岳野への松
 〳残なく拂ふもかせのこゝろにて
 たゆめはつもる松のしらゆき
 〳とにかくに冬はやまちそたえにける
 この後はつもる白雪〵
 〳けさみれは秋さく花のあともなし
 ゆきそふるえの宮城の、はき〵

16
ウ

105 〳さえ〵し雲は、れぬる山のはの
 ゆきよりいつるあり明のつき
 〳難はえやしほせふきこす浦風に
 〵かれ葉たになきあしのむらたち
 〳なにはかたゆふしほみちて蟹の住
 いそやにちかく啼ちとりかな
 〳さよちとりなくこゑ寒し晨明の
 〵月のてしほやみつの濱風〵
 〳心あるあまそきくらむ松しまや
 をしまのちとり月になくこゑ
 〳冬もなをあさきよとみそ氷ける
 たきりておつるうち川の水
 〳すはのうみや船路はたえてこのころは
 こほりのうへをかよふかちひと
 〳山さとのかけひのみつは音たえて
 こほりもゆめもむすふころかな
 〳なみこゆるうちの川瀬のあしろきに
 いさよふつきの影のさむけさ
 〳いかにせむあかてかたふく月かけに
 しくれてむかふみねのうき雲〵
 〳ふしのねはまたも有けりゆきのうへに
 けふりそなひくをの、すみかま

恋

17
オ

116 〳あやしくもなかめかちなるゆふへかな
 わかこゝろこそひころにもにぬ
 117 〳枕たにしらぬおもひをいかゝせむ 18才
 うちぬるほともあらはこそあらぬ
 118 〳としをふるやとにしけれ忍ふくさ
 した葉のつゆよ人めもらすな
 119 〳かくはかり人めをつゝむおもひありと
 ちらすなつゆの袖のあきかせ
 120 〳人やきくけしきはいろにみえねとも
 しのふの山の松の秋かせ
 121 〳逢事はたれゆへつゝむ恋ちとて
 おもひもしらす人のつれなき 18ウ
 122 〳あまころもぬれそふ袖のうらみても
 みるめなきさにもしほたれつゝ 〳
 123 〳あらくまのすむなる山のおくまでも
 きみたにあらはゆきてたつねん
 124 〳ひろせかはそてつくはかりたつぬれと
 あふせもしらぬ身をいかにせん
 125 〳いのらすよいなりの山のすきのはの
 つれなき色に人ならへとは
 126 〳きえかへりまつゆふくれの空の雲 19才
 〳 〳
 〳むなしきはてはうちしくれつゝ
 127 〳待わひぬたのめてもこぬいつはりは

128 〳たかならはしのゆふくれのそら
 〳たのめつゝくらせるよひの更けゆけは
 〳かこちかほなる袖の露けさ
 129 〳たのめつゝこぬいつはりをまつの戸の
 〳さゝて幾よか夜をあかすらん
 130 〳われのみやうきみかりのゝならしはの
 〳ひとよもなれぬ人をこひつゝ 19ウ
 131 〳しらせはや逢せもしらぬかたふちの
 〳やかてもふかきこひのこゝろを 〳
 132 〳あふせなきわかこひかはをゆく水の
 〳ふかきよとみに袖やくちなむ
 133 〳あはてのみたゝいたつらに恋しなは
 〳なにゝかへつる命とかみむ 〳
 134 〳わかこひはあふをかきりと思ふ身の
 〳ひをふるまゝによはりぬるかな
 135 〳ひとよとてあたにやおもふさゝ竹の 20才
 〳このよはかりのちきりならしを
 136 〳あふ事はたまさか山のたにかくれ
 〳 〳
 〳したゆく水のかかくれてのみ 〳
 137 〳あかさりしけさのなこりを身にそへて
 〳またねのとも起うかりけり
 138 〳別ちになかめし月の有明は
 〳つらきなからのかたみなりけり

139 馴し夜はならへしとこのまくらにも
 ぬるよなければうとくなりつゝ、(朱) 20ウ」
 140 わたりけむあふせもみえず飛鳥川
 きのふにかはる人のこゝろに、(朱)
 141 我ならはこよひの月にさそはれて
 おもはぬなかのひととひなん
 142 たつねゆくわかしるへせよ夜半の月
 馴にし袖のつゆのおもかけ
 143 風ふけはたゝよふ雲のなかそらに
 うきておもひのきえやはてなん、(朱)
 144 なかめやるそなたの雲をたよりにて 21オ」
 そてにしくるゝわかなみたかな
 145 けふりたつおもひはたれもするかなる
 ふしのたかねをよそにやはみる
 146 煙たつむろのやしまは遠けれと
 くゆるおもひのかよふころかな
 147 もしほやくなにはをとめかあしのやの
 ひまなくゝゆるしたけふりかな
 148 わか袖につれなきなみはかけなから
 月ひそこゆるす糸のまつ山 21ウ」
 149 いせ嶋やしほひのかたによる浪の
 いやとをさかるなかそつれなき
 150 時雨にはつれなき山のまつたにも

151 さそふかせにはなをなひきけり
 一よとてかりねのゝへのさゝまくら
 152 恋しとたれにいひてかなくさまむ
 おなしこゝろの人もなき世に、(朱)
 153 つれもなきひとをかならず恋よとは 22オ」
 こゝろよいかたれかをしへし
 154 いとせめて物おもふときの筆すさみ
 たゝかくことはこひしとそいふ
 155 よしさらはこゝろのまゝにうらみてん
 づらきを人のおもひしるやと
 156 さすか又こゝろやかよふつれもなき
 人もゆめちにあひみつるかな
 157 いかにせむはなにこゝろそうつりぬる
 みやまかくれのくち木なる身も 22ウ」
 158 しけかりしことはやまのあをつゝら
 おもひたえてはくる人もなし、(朱)
 159 あはてのみとしふるさとの軒のくさ
 かれねわするゝ言の葉もうし、(朱)
 160 身をしれはうらみんとしも思はぬに
 こゝろにあらすぬるゝ袖かな
 161 しらせはや人をうらみのこひころも
 なみたかさねてひとりぬるかな
 入新後

162 〱まれにてもあひみはとこそ思ひしに 23才
 〱たえぬはひとのうらみなりけり 〔朱〕
 163 〱ふえ竹のひとよのふしのうきねのみ
 なく 〱人をうらみつるかな
 164 〱あら磯にうちすてらるゝわすれかひ
 わすれす人をうらみつるかな 〔朱〕
 雑
 165 〱別路にいとひなれたるつらさにて
 さならぬよはのとり音もうし
 166 〱はる 〱と都をよそにへたつなり 23ウ
 越ゆくやまのあとのしら雲 〔朱〕
 167 〱しからきのとやまにふかき夕けふり
 よにたつ人のすみかならしを
 168 〱あまのはらふりさけみればあつま路や
 〱ふしのけふりに秋かせそふく
 169 〱ふしのねはいかなる神のちかひにて
 つれなきゆきの山となりけむ
 170 〱ゆふされはしほやみつらん伊勢の海
 ひかたにむかふ沖つしらなみ 24才
 〱おなしくはみやこへさそふなみもかな
 みつのこしまは人ならすとも
 172 〱むろのとや追てまきまはす夕風に
 かたほにかけてよするあまふね

173 〱はる 〱とよふねこくなるこゑすなり
 〱ひらのみなとの在明のそら
 174 〱たひ人のかちの、はらにひはくれぬ
 いづれのくさに枕むすはむ
 175 〱ゆきくれぬいさやとからんまつ風の 24ウ
 こゑするかたやすみよしのさと 〔朱〕
 176 〱世をいとふみ山のいほのさひしさに
 またうかれぬるわかこゝろかな
 177 〱かた山のそはのいしゐのさゝれ水
 あさましき身はすむかひもなし 〔朱〕
 178 〱つゝらはふやまのこさかの道せはみ
 くるしきものを世をわたるみは
 179 〱うかりけるみやまかくれのいはね松
 いろもかはらてくちやはてなん 〔朱〕 25才
 180 〱うきことのなをみにそはゝいか、せん
 よしの、おくに世をいとふとも 〔朱〕
 181 〱世中はかくこそありけれにこり江の
 堀江のみつのすみかたのみや 〔朱〕
 182 〱なにことか今はあらんとおもへとも
 身のゆくすゑそさすかゆかしき 〔朱〕
 183 〱行すゑのあらましことになくさみて
 はかなく過す月日なりけり 〔朱〕
 184 〱うき身にもなを行末そまたれける 25ウ

185 きみかみかけをたのむはかりに／＼
 なかきよにまよふうきみのしるへせよ

わしのみやまの晨明のつき

186 君か世はなからのはまにひろふとも

つきぬまさこのかすも

かきらし

(一行空白)

已上百八十六首

墨者中書大書士御點
朱者戶部尚書點也

26才

右愚詠去正元二年之春依竹園

之召所書進三百首之内也兩方

無點哥等除之畢

(一行空白)

正應五年五月日書之前參議藤原朝臣

(一行空白)

勅點十八首 頭朱

永仁元年十二月十二日被返下之

26ウ

(一丁白紙)

27才

(二行空白)

此一帖者參議藤原雅有卿之以

自筆本書寫之畢

(二行空白)

寛文十二壬子年仲冬念四

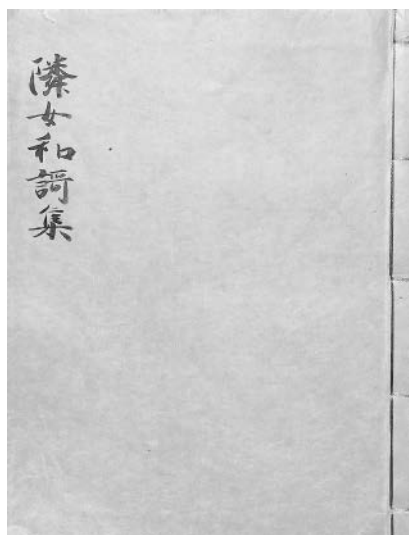
27ウ

(三丁白紙)

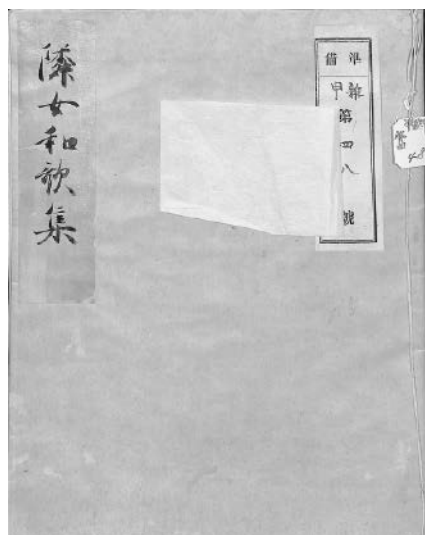
『後表紙』

【図版】

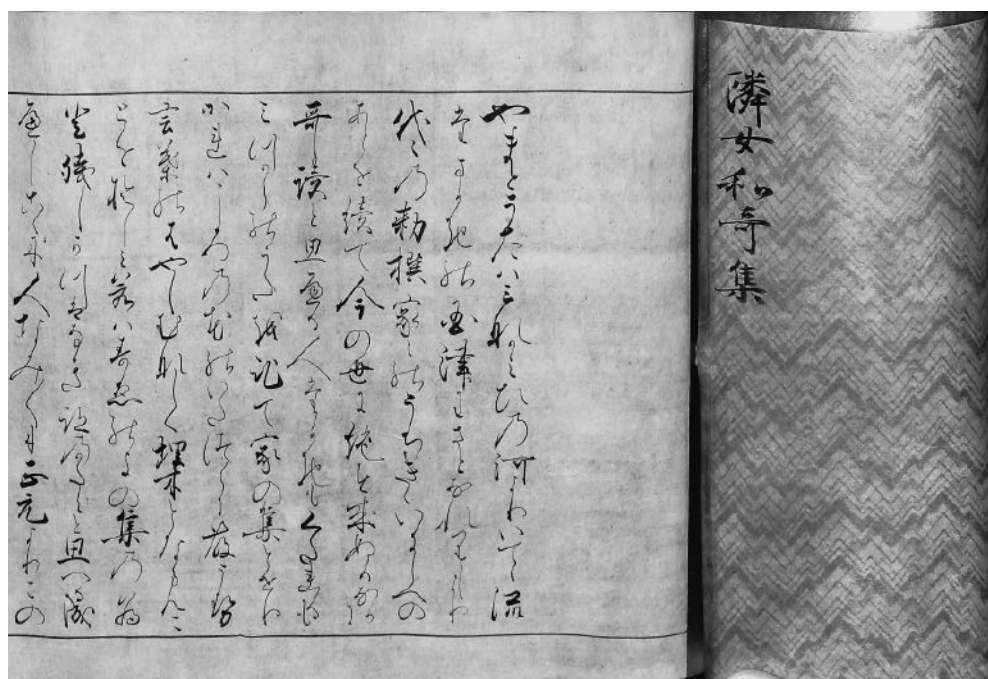
図版1 池田光政筆『隣女和歌集』寛文十二年六月書写本 表紙



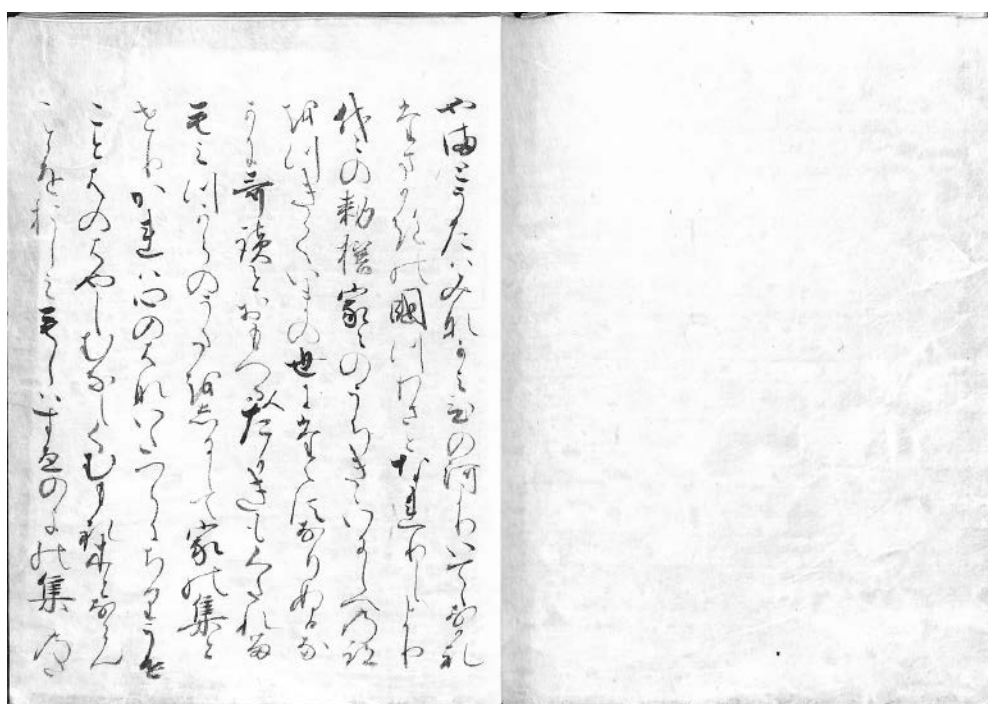
図版2 池田光政筆『隣女和歌集』寛文十二年十一月書写本 表紙



図版3 池田綱政筆『隣女和歌集』表紙・仮名序



図版4 池田光政筆『隣女和歌集』寛文十二年六月書写本 仮名序



図版5 池田光政筆『隣女和歌集』寛文十二年十一月書写本 仮名序

